

## 1P155

### 成長曲線・肥満度曲線を用いた、幼児の成長障害の検討

原光彦<sup>1,2</sup>、西村美帆子<sup>1</sup>、村山伸子<sup>3</sup>、石田裕美<sup>4</sup>、由田克士<sup>5</sup>、野末みほ<sup>6</sup>、緒方裕光<sup>4</sup>、阿部彩<sup>7</sup>

- <sup>1</sup>東京家政学院大学 人間栄養学部
- <sup>2</sup>日本大学医学部 小児科学系小児科学分野
- <sup>3</sup>新潟県立大学 人間生活学部
- <sup>4</sup>女子栄養大学 栄養学部
- <sup>5</sup>大阪市立大学大学院 生活科学研究科
- <sup>6</sup>常葉大学 健康プロデュース学部
- <sup>7</sup>首都大学東京 人文科学研究科

#### 【背景と目的】

幼児期は様々な生活習慣の基礎が身につく時期であり、将来の非感染性疾患の温床となる肥満も幼児期に始まる例が多い。乳幼児期は人生の中でも成長が著しい時期であるが、3歳健診以降は就学前健診まで健診の機会が乏しいため体格の変化や成長障害の頻度を検討した報告は少ない。今回我々は、一般の保育園に通園中の幼児を対象として、幼児期の成長障害の出現頻度やその内容を明らかにする目的で研究を行なった。

#### 【方法】

川崎市の私立保育園3施設に通園中の、3歳から6歳の幼児108名(男71名、女37名)を対象とした。過去の園内健診で蓄積された身長体重の計測データから肥満度を算出し、「子どもの健康管理プログラム」を用いて成長曲線・肥満度曲線を作成した。2歳時の体格と、成長曲線・肥満度曲線のパターンを用いて成長障害の出現頻度や内容を検討した。体格判定基準は、肥満度+15%以上を肥満、-15%未満を痩せ、性別年齢別身長が97パーセンタイル値(th)以上を高身長、3th未満を低身長とした。

#### 【結果】

対象の平均年齢は5.0±0.9歳、平均肥満度は+1.5±8.8%で性差はなかった。3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスの平均肥満度に有意差はなかった。2歳時の体格は、正常84名(78%)、肥満19名(19%)、低身長4名(4%)、痩せ1名(1%)であった。成長曲線・肥満度曲線を用いた検討では、正常に成長している者は96名(89%)成長障害がある者が12名(11%)であった。成長障害の内訳は、肥満関連が9名(75%)痩せ関連が2名(17%)、思春期早発症が疑われる高身長が1名であった。

#### 【結論】

幼児期の成長は学童期以降より変化が大きく、2歳時には体格が正常でない者が22%も存在していた。その多くは3歳以降には正常化した。それでも介入や精査が必要な例が11%認められた。幼児期の成長評価の際には、成長曲線や肥満度曲線を利用して、継続的で客観的な評価を心がけ、必要な介入の機会を見逃さないことが大切である。

## 1P156

### 栄養士による入院時の食物アレルギー問診の有用性について

稲垣 智子

社会医療法人 真美会 大阪旭こども病院 栄養科

#### 【背景】

近年、乳幼児の食物アレルギーを意識する養育者が増えてきている。しかし、食物アレルギーに関する知識は曖昧で、不必要な除去による食の偏りが生じる可能性がある。

#### 【目的】

当院では入院時に問診票を用いて栄養士が除去理由を問診し、必要に応じたアドバイスを実施している。その結果退院後も必要最低限の除去とし、安心安全な食生活を送れるように支援している。その問診やアドバイスが患者にとって有用かどうかについて検証した。

#### 【対象者および方法】

2019年9月から2020年1月の期間に入院した患者のうち、特定食物の除去を行っており問診票の記入と栄養士による問診をし得た137名を対象とした。除去の理由や定期受診の有無などを聞き取り、除去範囲や受診の必要性についてアドバイスをを行った。

#### 【結果】

1. 除去食材(重複あり): 卵41.7%、牛乳17.1%、小麦6.3%、エビ・カニ8.3%、果物7.5%、その他19.1%。2. 除去理由の分析: ①医師の指示90名(65.7%) ②保護者の判断34名(24.9%) このうち、定期受診あり7名、なし27名。③未摂取13名(9.5%) このうち、1歳未満が4名おり、4名とも入院中に摂取を開始し、アレルギー反応はなかった。問診の結果、未摂取の8名を含めて除去が解除できたのは13名(9.5%)だった。

#### 【考察】

保護者の判断で除去をしている場合、定期受診をしていない者が多く、受診の必要性を伝えた。また、医師からは除去不要と言われていても不安が強く、自宅では摂取を開始できない例や、同胞に食物アレルギーの既往歴があったことから、医師の診断を受けずに除去をしている例があった。また、調整粉乳を飲ませているにもかかわらず牛乳を除去している例などもあり、知識の不足による不必要な除去が行われていることがわかった。栄養士が丁寧な問診を行ったことで、養育者の食物アレルギーに対する誤解や疑問を解消することができた。除去を解除することができた例もあり食の幅を広げることにつながったと考える。

#### 【まとめ】

今回の研究で、不安から除去を解除できない現状が多くあることがわかったが、栄養士のアドバイスにより13名が除去を解除することができ、専門的な問診とアドバイスが有用だったといえる。